少年少女愛の小説選

シカのいる森

少年少女愛の小説選

シカのいる森

川村たかし著

実業之日本社

NDC 913
少年少女愛の小説選
シカのいる森
川村たかし著
実業之日本社
1971年

本文10ポ活字使用　192ページ 20.5 cm
小学校上級〜中学生むき

検印省略

シカのいる森
1971年12月25日　初版発行

著　者　川村たかし
発行者　増田義彦
発行所　株式会社**実業之日本社**
東京都中央区銀座1-3-9（〒104）
TEL（562）4311　振替　東京 326
印刷所　株式会社 東京研文社

© Takashi Kawamura 1971. Printed in Japan

8093—804031—3214

はじめに

奈良は訪れてくる旅人の町です。すぎていくものは人ばかりではなく、歴史もさっさと通りすぎていきました。けれども、冬二も敦子もただ自分の道を自分で歩こうとしたのです。神の啓示のような合唱の中を――。

川村たかし

もくじ

第一章　初夏の章

敦子のおくりもの――6

小さな秘密――13

セックス感度――23

第二章　子ジカの章

子ジカどろぼう――30

冬二のばあい――37

いたずら少女――46

第三章　野のチョウの章

野をかけるチョウ――54

夜の練習――62

ゆれる心――72

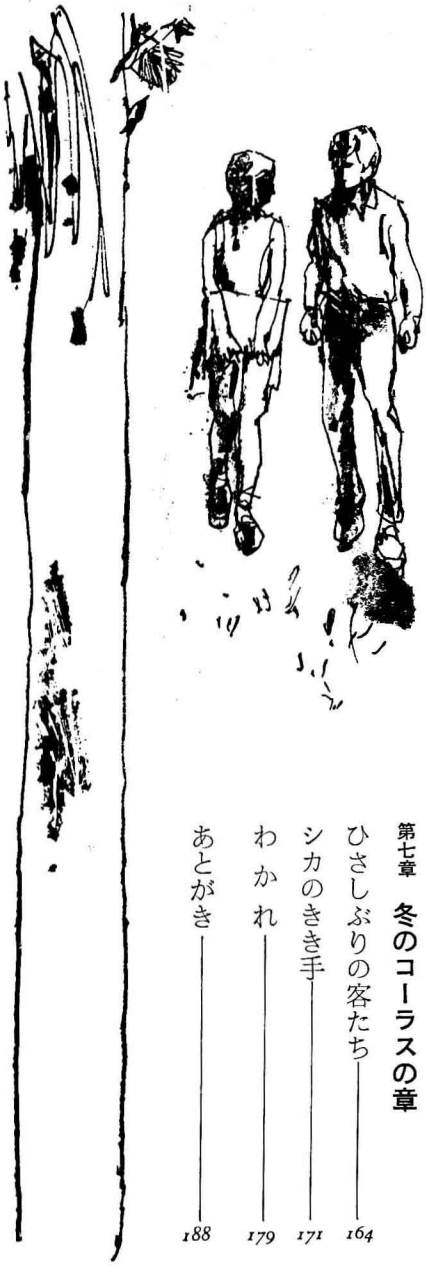
第四章　雨の譜の章

ふじだなの下の店――82

さびしい野――92

雨の森で――99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



第五章　骨梢（ほねこずえ）の章

白い梢（こずえ）――110

ふたりの守り神――118

魂（たましい）はチョウになる――128

第六章　いたずらな愛の章

きれた糸――138

小人の町――146

じゃまだった人に――155

第七章　冬のコーラスの章

ひさしぶりの客たち――164

シカのきき手――171

わかれ――179

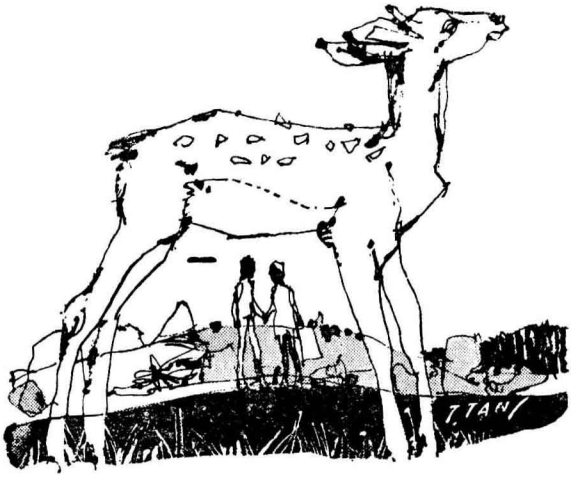
あとがき――188

■この本の絵をかいた人■

谷（たに）　俊（とし）彦（ひこ）

一九二一年東京にうまれる。
川端画学校修。その絵は、格調のある抒情性ゆたかなことで知られる。日本美術家連盟所属。

第一章　初夏の章



敦子のおくりもの

コップにはうす紙をかぶせた。こぼさないように両手でそっと持って、敦子はうら口をでた。

町は夕ぐれて、風がさわやかに昼のよごれをあらっている。あかりがともりはじめたせまい町なみの中を、さまざまのにおいが流れていた。くだもののにおい、若葉のにおい、それにかすかな下水のにおいが、敦子をそっとつつむ。だれかがよんだような気がしたが、彼女はふりむかなかった。わき見をすれば、コップをかたむけてしまいそうな気がして、両手でしっかりとつかむ。つつんだまま胸の高さにあげて、いそぎ足に歩いていった。コップの中の氷片がコチコチとなると、自然に足がはやくなった。

ゆるい坂道をのぼりつめると、ひとむれのサラリーマンが道をふさぐようにむかってきた。電車がついたらしかった。敦子は立ちどまって、ての中のものをからだのかげにかくすようにした。そうすれば、だれが見ても父親をむかえにきた娘が、電柱のかげにたたずんでいるように思うにちがいない。彼女はひとりそう思った。

けれども、夕方の町はあわただしかった。彼女に声をかけるものは、ひとりもいなかっ

た。すると、もう敦子は堂々とコップをたからもののようにかざし、ゆっくりと歩いていった。

坂の半ばを右に折れると、学校がある。音楽室に灯が見えると、彼女ははじめてほうっと力をぬいた。そのはずみに、うすい紙がべっとりとにじんだ。中みがこぼれて、手をつたった。

「あっ。」

と、思わず彼女はくちびるをかみしめる。あらためてコップを両手につつみこんで、そろりそろりと歩いていった。ここまできてこぼしてしまっては、なんにもならない。

ピアノの音が、がらんとした運動場にふきこぼれていて、そよ風がここではかわいた太陽のにおいをのこしている。

窓の下で敦子は、

「先生。」

と、よんでみた。

「先生、糸井先生。」

それでもききめがないとみると、敦子は花壇のブロックの上にのぼった。

「先生、私です。相良です。はいってもいいですか。」

中はきゅうにしんとなり、ガラス窓があいた。いぶかしそうに先生は顔をつきだしたが、
「なあんだ、きみか。なにしにきた。」
と、両うでを窓わくにのせた。そのあいだじゅう敦子は、コップをブラウスのすそでかくしていた。なにしにきた、と問われると、こたえようがなかった。彼女はおかしくて、・
「なにもしにきません。でも、はいっていいですか。」
「ああ、いいよ。」
先生は両手であごをささえるようにしたが、敦子は気になったので、うつむいたままいった。
「先生、シャツのひじがよごれます。きょうは土曜でそうじはしていません。」
先生ははじかれたようにうでをひっこめ、
「さあ、むこうをまわってこい。」
と、おこったようにいった。
廊下は暗かった。わたり板のところでつまずき、彼女はあやうくコップをとりおとすところだった。もう氷はとけたものか、音はしなかった。彼女は半分ほどにへってしまったコップを両手につつんだまま、そっと教卓の上にのせると、
「ああ、しんどかった。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、かたをおとした。
「なんだいそりゃ。」
「お酒です。先生がいつかお酒はすきだとおっしゃったので、持ってきました。青いお酒です。」
「酒？」
先生はまゆをひそめた。しかられそうなので彼女は小さくなった。先生はのろのろと立ちあがると、コップに近づく。それから一度のばした手をとめたまま、
「これはペパーミントかな。でも、どうしてここへ。」
けげんそうな顔をする。敦子はにわかに胸がどきどきした。ほおがあつくなった。
「のんでもらおうと思って持ってきました。」
声が小さくなった。目のまえがはずかしさでくらくらして、思わずにげだそうとしたが、先生の声がひきとめた。あたたかい声がからだをつつみこんだ。
「そう、そのためにわざわざ持ってきてくれたのかね、ありがとう。」
先生はコップの上の、ぬれたうす紙をそうっとはずした。敦子はぎゅうっとかたくなってうつむいていた。
「家からだと、三百メートルはあるじゃないか。」

彼女は顔をあげて、目をかがやかせた。
「きっとまだ学校にいらっしゃるだろうと思ったのです。それで――。」
「おとうさんやおかあさんは知っているの？」
「いいえ。でも、いいんです。これは私だけの――。」
秘密(ひみつ)です、といおうとして、敦子(あつこ)はことばをのみこんだ。両手をぱちっとたたいて、
「ねえ、のんでみてください。」
先生はちょっと口にふくむと、
「うまい。」
と、いった。のどぼとけがごくりと動いた。近くのいすをおしやって、
「まあかけたまえ。」
自分もこしをおろしながら、二度めからは音たててすすった。
「私ね、なんだかかんでわかったの。まだ先生が学校にのこっていらっしゃって、むずかしい顔をしてピアノをたたいているにちがいないって。晩(ばん)ごはんはまだなのでしょう。おなかもすいているにちがいない、お酒ものみたがっているにちがいない。そう思って、そうっとぬけだしてきました。」
「うまいよ。うまいが、これはへんにあまい酒だ。」

敦子はみじかいスカートのすそをひっぱった。かたをおとしてうつむいた。

「ごめんなさい。それ、おかあさんがのむお酒なの。おとうさんのはウイスキーだからきついと思って。よっぱらってピアノがうまくひけないと思って——。」

先生はにわかにどぎまぎした。

「よし、それじゃお礼になにかひいてあげよう。だまってきたのじゃ、うちの人が心配しているかもしれない。一曲おわったら帰るのだよ。」

敦子は返事をしなかった。まぶしそうに先生を見てまばたいたが、すこし口をゆがめた。

「いいんです。もう帰ります。」

先生はコップの酒をのみほすと、だまって敦子にかえした。それから大きな両手を、かたにのせた。

「へんな酒だなんていって、ごめんよ。ペパーミントにはなれていないんだ。君が、おでこにつぶつぶ

のあせをかいて持ってきてくれたことは、とてもうれしかった。けれど――。」
敦子はからだじゅうがガッとあつくなった。よろこんでもらえたことがわかった。かたにおかれた両手から、先生のあたたかさがからだの中に流れこんでいる。先生の声はいくらかかすれていた。
「？」
「けれど、もうこんなことをしてはいけない。いいね、わかるかい。」
敦子は目をみはってこたえた。つんとしてあごをあげた。
「わかりません。」
「いかん、わかりたまえ。」
「いいえ、わかりません。すきな人のことなら、なんかてつだいたいのです。」
先生は両手をはなした。ぽかんと口をあけて敦子を見たまま、立ちすくんだ。だが、あわてたのは、敦子のほうだった。自分のことばで自分に火がついていた。もうこらえようがなかった。彼女はぱっとかけだすと、暗い廊下にとびだし、つんのめりそうになりながら運動場を走っていった。
ほっぺたも耳も焼けている。と、思うと氷水をあびせかけられたように、からだじゅうがふるえた。彼女は一気に坂をかけおりて家の中へとびこむと、ベッドにもぐりこんで毛

布を頭の上までひっかぶった。すると、おかしさがあとからあとからこみあげてきた。彼女は毛布の下でクックックッとわらいながら、からだをよじった。

あわてた先生の、まのぬけた顔がまだ目のまえにのこっている。敦子は毛布からひょっこりと顔をだすと、光る目をくりくりさせた。

――そう、すきだもの。

それから敦子はも一度くらやみの中へもぐりこんだ。だが、彼女はもうぴくりともしなかった。

小さな秘密

つぎの日の午後も、彼女はながいこと運動場のすみの、ポプラのかげにすわっていた。そこは日かげになっていて、日ざしはじかにこない。自分のまわりに若葉のかげがおどっていて、まるで空をとんでいく妖精のようになってしまう。

むこうのすみでは、野球部が練習している。敦子はぼんやりとそのようすを見ていた。けれども、すべての神経は流れでてくるピアノの音にすいとられていた。

糸井先生の家が改築中のため、ここしばらくは学校で練習しているのを彼女は以前から

知っていた。けれども、ゆうべのことがあった。教室へははいっていけなかった。

きこえてくるのは、むずかしい曲だ。むずかしい曲をえらんで、先生は自分のためにひいていてくれる——。彼女の心はみたされていた。

やがて、そのピアノがふっとやんだ。思わず彼女が顔をあげたとき、ふいに声がした。

「あら、アコやないの。」

敦子ははじかれたように立ちあがった。心の秘密をのぞかれたようにどぎまぎして、

「まあ、おスガ。どうしたの？」

「どうしたのもないやないの。英語の塾へはきやへんし、家へいけば学校やというし、学校へくればカメの子みたいに甲らをほしてるし、どないなってんの。おかしいぞ。」

辰田周賀子は、ひとさし指で鼻のあたりをこすった。

「ところでね、いま、そこできかれたんやけど、あの人。」

ふりかえるのを見ると、むこうにひとりの少年が立っていた。やせて、髪をのばしている。中学生ではなかった。

「合唱隊にはいりたいから、もうしこむっていうんよ。どないしたらええかしらん。」

「合唱隊？」

敦子はああとうなずいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com